



DES CHANSONS ET DES VOIX

心を語る歌と声の芸術

2025年11月15日

いわき

YukariとPhilippeの歌のプログラム

Programme de chansons
interprétées par Yukari et Philippe

1) この歌「**La Bohème**（ラ・ボエーム）」は、フランスのシャンソン歌手シャルル・アズナヴァールによる代表的な作品です。歌詞では、若い頃の芸術家としての貧しくも情熱的な日々、仲間との友情、恋、そして過ぎ去った青春への深い郷愁が描かれています。主人公がかつての思い出の場所を訪れ、変わってしまった景色に胸を締めつけられる様子が印象的です。

2) **La mer** 「ラ・メール」は、フランスの歌手シャルル・トレネが作った、海の美しさと心地よい雰囲気を讃える名曲です。

歌詞では、海が銀色に輝いたり、雨の中で色合いを変えたり、夏の空と一つに溶け合うように見えたりと、海のさまざまな表情が生き生きと描かれています。

波は白い羊にたとえられ、海はその羊たちを見守る優しい羊飼いのように表現されています。また海は、浜辺を歩く人の足や白い鳥、古びた家々までもゆりかごのように包み込み、静かに揺らしている存在として描かれます。

そして最後には、海が歌い手の心を一生のあいだ優しく揺さぶり続けた、と語られます。全体を通して、海への深い愛情と感動が込められた歌だということが伝わってきます。

3) 「**La vie en rose**（ラ・ヴィ・アン・ローズ）」は、エディット・ピアフの代表的な愛の歌です。この歌では、恋人と一緒にいると、世界がバラ色（幸せいっぱい）に見えるという気持ちが表現されています。

恋人の優しい言葉やまなざしが、歌い手の心を温かくし、不安や悲しみを忘れさせます。恋人に抱きしめられると、まるで人生そのものが光に包まれ、愛こそが本当の幸せだと感じられるのです。

歌全体を通して、愛に満たされたときに感じる「世界が明るく見える」感覚が、シンプルで美しい言葉で語られています。

4) 「**Les Feuilles mortes** (枯葉)」は、失われた愛と過ぎ去った時間をテーマにしたとても有名なフランスのシャンソンです。

歌詞では、秋に舞い落ちる枯れ葉が、二人と一緒に過ごした日々や、今は終わってしまった恋を思い出させます。

歌い手は、

- 昔の幸せだった思い出、
- 恋人と交わしたやさしい言葉、
- 二人が手を取り合って歩いた日々

を胸に抱きながら、今はその恋がもう戻らないことを静かに受け止めています。

枯れ葉が風に吹かれて散っていくように、愛もまた時とともに消えていくという、切なくて美しい気持ちが歌われています。

5) 「**Les moulins de mon cœur** (心の風車)」は、ミシェル・ルグランが作曲した、美しくて少し切ない愛の歌です。

歌詞では、恋に落ちたときの気持ちや、愛が心の中で終わりなく回り続ける様子を、**風車（ふうしゃ）**のイメージで表現しています。

歌い手の心の中では、

- 過去の思い出、
- 愛する人の姿、
- 失うことへの不安、
- そして愛の強い感情

が、止まらない風車のようにくるくる回っています。

比喩（メタファー）がたくさん使われており、川の流れ、季節の移り変わり、輪の形、果てしない旅など、愛の複雑さと深さを象徴するイメージが次々と登場します。

全体として、この歌は「愛が人の心にどれほど大きな影響を与え、終わりなく動かし続けるか」を詩的に描いています。

6) 「**Tombe la neige** (雪が降る)」は、サルヴァトール・アダモの代表的な恋の歌で、失恋の悲しみをゆっくりとしたメロディーで表現しています。

歌詞では、雪が静かに降り続ける様子が、

- 恋人が来ない寂しさ、
- 心の冷たさ、
- そしてあきらめに近い悲しみ

を象徴しています。

歌い手は、雪が降る中、恋人を待ち続けています。

しかし恋人はもう来ないことを分かっていて、雪が降り積もるにつれて、自分の孤独と悲しみが深まっていくと感じています。

歌全体は、雪の静けさの中で「愛が終わった」という現実を受け入れようとする、とても切ない気持ちを描いています。

7) 「**Chevaliers de la Table Ronde** (円卓の騎士たち)」は、フランスの伝統的な飲み歌・民謡です。

アーサー王の「円卓の騎士」たちを題材にしていますが、内容はとてもユーモラスで軽い雰囲気です。

歌詞では、騎士たちが冒険ではなく、ワインを飲んで楽しむ様子が描かれています。

騎士たちは気取らず、仲間と一緒に笑いながら、杯をかわし、ちょっとした冗談やお調子者のやり取りを楽しみます。

この歌は、実際の歴史や伝説よりも、

仲間意識・宴会・陽気さ

を表現したものです。

フランスでは飲み会や集まりでよく歌われます。

8) 「À la Bastille (バストイユにて)」は、アリストイド・ブリュアンが歌った、19世紀末のパリの下町の雰囲気や労働者たちの生活と怒りを表現する歌です。

歌詞では、バストイユ周辺に住む人々の

- 貧しい生活、
- 不公平さに対する不満、
- 社会や権力への皮肉、
- そして仲間同士の連帯感

が力強く描かれています。

ブリュアン特有の荒っぽい言葉遣いやユーモア、そして庶民の語り口が使われており、当時のパリの街の雰囲気がよく伝わります。

歌の中の「バストイユ」は、革命と自由を求める民衆の象徴としても描かれています。

9) 「Nathalie (ナタリー)」は、ジルベール・ベコーが歌った、有名でロマンチックなシャンソンです。

歌詞では、パリからモスクワを訪れた男性が、ナタリーというロシア人の女性ガイドと一緒に街をまわり、彼女にだんだん心を惹かれていく様子が描かれています。

二人は赤の広場や大学などを歩き、ロシアの寒さの中で温かい時間を共有します。

やがら男性は、ナタリーにただ案内してもらうだけでなく、恋に落ちている自分に気づきます。

でも、歌の雰囲気には少し切なさがあります。

二人の時間はとても甘く美しいけれど、

- 文化の違い、
- 距離、
- そして別れが近いこと

が、どこかに感じられます。

「ナタリー」は、短い旅の間に生まれた淡い恋の思い出を優しく歌った作品です。

10) 「**Mexico**（メキシコ）」は、ルイス・マリアーノが歌うとても明るく元気な歌で、喜びと冒険心にあふれています。

歌詞では、メキシコという遠い国を、

- 太陽が輝き、
- 音楽と情熱があふれ、
- 夢と自由を感じられる場所

として描いています。

歌い手は、メキシコに行くことをわくわく楽しみにしながら、そこでは毎日が祝祭のようで、人生がもっと大きく、もっと鮮やかに見えると言います。

全体的に、この歌は旅の喜び、異国への憧れ、そして明るい未来への希望を元気なメロディーに乗せて表現した作品です。

11) 「**Comme d'habitude**（いつものように）」は、クロード・フランソワが歌った、とても有名なフランスの失恋ソングです。

歌詞では、恋人との気持ちがもう離れてしまい、同じ家にいても心が通じない毎日が描かれています。

二人はまだ一緒に暮らしていますが、

- 会話がなく、
- 目を合わせず、
- 愛も情熱ももうない

という冷たい関係になっています。

歌い手は、それでも「いつものように」日常生活を続けます。

しかし本当は、関係が終わってしまったことを深く悲しんでいるのです。

全体として、この歌は、愛がゆっくりと消えていき、ただ習慣だけが残ってしまった、静かで苦しい別れの気持ちを表現しています。

12) Imademo (今でも)

この曲は、ユカリがふるさとであるいわき市の海へ向けて書いたオリジナル曲。

震災後の想いと、故郷への愛、そして「今でも変わらぬ心の絆」をテーマにしています。

この作品はフランスで大きな関心を集め、リヨン・パリ・ニースで開催された「今でも」コンサートとして公演・取材されました。

フランス語訳を手がけ、情感豊かに歌っているのはフィリップ・マルシャン。

2人の心のコラボレーションはヨーロッパでも注目され、

来年のオーストリア公演へとつながっています。

日仏の絆から世界へと広がる、愛と希望の歌です。

13) 「Aux Champs-Élysées (オー・シャンゼリゼ)」は、ジョー・ダッサンが歌った、とても明るく楽しいフランスの名曲です。

歌詞では、パリのシャンゼリゼ通りを歩きながら起こる、偶然の出会いと小さな幸せが描かれています。

主人公は、気分が沈んでいても、シャンゼリゼを歩けば、

- 音楽が聞こえ、
- 人が笑い、
- 楽しい出来事が生まれ、
何でも起こるように感じられる、と語ります。

ある日、そこで出会った一人の女性が、主人公の人生を明るく照らします。

シャンゼリゼは単なる通りではなく、恋が始まり、心が軽くなる特別な場所として歌われています。

歌全体が、パリの開放感と、出会いがもたらす喜びを軽やかに表現しています。